

絵本大賞入選者へのメッセージ

はじめにー総評

荒川区主催の柳田邦男絵本大賞は、気がつけばはや十三年目になりました。

今回、「絵本を読んで柳田さんにおたよりを書こう」という呼びかけをしたのは、夏から秋のはじめにかけてでした。新型コロナの流行が第2波に入っている最中でした。

こういう危機的な時代にこそ、子どもも大人も本や絵本に親しんで、旅行やイベントに行けなくても、心を豊かにする日々を過ごしてほしいという願いもこめていました。でも、みんな緊張を強いられた日常が続くなかで、はたして絵本を読み、じっくりと感想をまとめておたよりを書いてくれるかなと案じていました。

今回応募対象にしたのは、「子どもの部」は、これまでどおり荒川区内の小中学校の生徒たちでしたが、高校生以上を対象にした主に親たちの「一般の部」は、はじめて荒川区に限らず全国に広げました。

応募状況の結果はどうだったか。「子どもの部」は1065点と、今年も6年続きの一千点を超え、子どもたちがコロナ禍のなかにあっても、しっかりと絵本を読み、おたよりを書くゆとりを失っていないことが、数字になって表れて、この賞が区内に根づいていることがわかりました。また、保育園児からおたよりがあり、うれしく読ませてもらいました。

しかし、「一般の部」は、荒川区以外からも、（北海道、茨城県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川

県、長崎県、大分県、熊本県）と全国各地から応募がありました。全体では二十一点と、例年より少なくなりました。やはりコロナ禍の影響でしょうか。また、全国的には対象を広げたことが、まだ伝わり切っていないという事情もあるでしょう。これからも継続することで、各地からの応募は増えてくると思います。（ちなみに私も選考にかかわっている埼玉県三郷市主催の、自分が感動した本を家族の誰かにすすめる全国絵手紙コンクールには、今回も一万通以上の作品が集まりました。）

ともあれ「一般の部」のおたよりのなかにも、しっかりとした内容の作品が少なくなかったのです。いつものように大賞をはじめとする入選作品を選ぶことができました。

毎年入選作品集の総評のなかに書いてきたよう

に、荒川区内では、「家庭の絵本文化」が定着してきたことを、今回も感じました。

絵本の感想文を書くことは、子どもは子どもなりに、大人は大人なりに、自分を見つめなおす心のいとなみになるのです。そういう心のいとなみは、心の成長や成熟の節目になります。単に宿題の答案を書くのとは違う意味があります。荒川区の子どもたちや大人たちが、一千通以上ものおたよりを毎年寄せるということは、そういうことのない地域の子どもたちや大人たちと、心の成長・成熟がどこかで違って来るに違いないと、私は思っています。

今回応募してくださった子どもたちと大人の方々に感謝します。